

## 第18回教育相談全国研究集会全体会報告 (2011年11月14日・15日開催)



「『私』になるための支援としての教育相談」というテーマで津田塾大の山崖俊子先生の全体講演が行われた。先生の話は、『本来カウンセリングとは』と言う基本的な内容から始まった。お話を聞いて、わたし達相談員が、相談を受けた時「答えは相談者自身の中にある」という基本認識を忘れてはいけなと痛感した。納得できる答えは相談者自身の内部にある、だけどそれが何であるか、明確になっていないが故の相談である。明確にする手助けをするのが相談員の仕事であって、相談員が相談内容に対して答えを出す人、指導する人になってはいけなことを再認識させられた。

不登校についての話では、「ひきこもる（不登校）ことは『私』育て」であるという話をされた。子どもにとって「不登校」は初めての反抗で、不登校のあるがまま認め、受容し細々としたかかわり続けることが大事と話された。これまでの成長の中で先送りされてきた「私」育てをやっているのである。子どもが（相談者）が「自分自身になる」ために、一貫して寄り添い続け、理解ある相談員になることができるかどうかを考えさせられた講演だった。

(文責 徳永恭子)

### 第一分散会

テーマ：「相談室を充実させるために」

(司会 濱田真由美 16名参加)

参加者の自己紹介に併せ、各相談室の運営にかかわる事、宣伝・PRの工夫、相談員の世代交代等、その取組みや課題が話し合われた。

相談室の運営は、組合の支援でという所が多いが、社団法人化して対応している相談室もあった。相談の内容によっては、他の専門機関や専門家と連携して対応するという手立てがとられており、また、現退一致の研修会の開催、教研集会への参加等、現職との交流の大切さが指摘された。宣伝・PRについては、電話帳のハローページへの掲載、時刻表の利用、案内カードの配布等々実践の交流を行った。作りたてのパンフレットを持参してくれた相談室もあった。相談員の多くは、退職した教職員であるが、教職員以外にも依頼している相談室もあり、また世代交代の手立ての一つとして、定年前の退職予定者に声かけをしている相談室もあった。質疑等も含め終始熱心な話し合いで、今後の相談室の取組みへの示唆も多く、有意義な内容であった。

(文責 上田典男)

### 第二分散会

テーマ：「相談者の気持ちに向き合うために」

(司会 御子柴寿子 20名参加)

参加者の自己紹介、相談事例（休職中の教職員、不登校、子育ての不安等々）を通して相談活動の状況が報告された。

第1日目の山崖先生の講演を受けて、相談員は相談者の思いをしっかりと受け止めて、相談者にどのように向き合っていけばよいか話し合いが進められた。

不登校の子どもの母親の相談事例を中心に、母親の気持ちに寄り添うということは、単に主訴を解決することではなく、相談の中で、子どもの心の成長を認め、親の気づかない子どもの良さを共有することの大切さや子どもとのかかわり方をアドバイスすることが母親への寄り添いにつながっていくのではないかと話し合った。

相談者の気持ちに向き合うためには相談者の気持ちに寄り添うことが大切であるということで締めくくられ、今後の相談活動における基本的な姿勢について理解を深めることができた。

(文責 服部嘉光)